



(通称)子ども110番の家の取り組みについて

加藤 大輔

問 子どもたちが緊急時に助けを求められる場所である(通称)子ども110番の家の看板表示は、学区で異なっており、高萩地区では「子どもをまもる家」、高萩北地区では「子どもを守り育てる家」、高麗川地区では「子どもを守る家」、高根地区では「高根子どもを守る家」、高麗地区では「ひまわりの家」、武蔵台地区では「武蔵台・横手台子どもをまもる家」とされているが、この取り組みに対する市の考えは。

答 地域の皆様の協力で看板が設置されることで、地域全体で子どもたちを見守り育てるという機運の醸成や地域における防犯意識の高揚、犯罪抑止などに一定の効果があると認識しており、継続した取り組みの必要があると考えている。



学区毎に異なる看板

問 市で現状を確認し、取り組みをリードする考えはあるか。

答 取り組みを継続的、発展的に実施していくためには、地域の皆様の理解や協力は欠かせないものと考えている。本市のコミュニケーション・スクールを基盤とした小中一貫教育の開始は、PTA、青少年健全育成の会、地元自治会など学校活動に関わる方々が、この取り組みや活動内容を見直され

る機会であると捉えている。今後、各地区の学校運営協議会で、現状や方向性などに熟議されるよう働きかける。

日高総合公園の駐車場について

問 駐車場の混雑状況を把握しているか。

答 総合公園は、市民をはじめ近隣市町の方も利用しており、駐車場が混雑することは、把握している。

問 駐車場の確保対策は。

答 特に混雑する休日は、野球やサッカーの試合も多く、駐車場を利用する方には、乗り合いの協力をお願いすることも、園内のロータリーを臨時駐車場として利用いただくことで、駐車台数確保に努めている。

今後は、市浄化センター敷地の利用や整備の可能性について関係部署と調整を図っていく。



インクルーシブ遊具について

三木 伸也

問 インクルーシブ遊具というのは、身体に障がいがある子ども、ない子どもと一緒に遊べることが出来る遊具で、例として、ハーネスが付いていて落ちないようになっているブランコがある。このことを踏まえて、市が管理する公園の数と園内の遊具の数を確認する。

答 公園は、64カ所あり、遊具は、設置のない所もあるが、多い所では16台あり、平均で2台となる。

問 インクルーシブ遊具を利用するであろう障がいのある子どもの人数は。

答 現在、障がい者手帳を所有している小学生以下の方は、72人である。

問 遊具の設置について保護者などに意見を聴く考えはあるか。

答 公園の再整備等の際に意見聴取を検討したい。

問 インクルーシブ遊具についての見解は。

答 年齢や障がいのあるなしに関わらず、遊びの選択肢や楽しみ方などが広がるものと考えている。

問 インクルーシブ遊具の設置についての考えは。

答 地域の要望に沿った遊具を設置できるように努め、研究を行っていく。



障がいがあっても遊べる遊具

問 障がいなどへの理解と支援を求めるマークについて

色々あるが、これらのマークの普及啓発はどのように行っているか。

答 市ホームページや広報、ポスター等で主要なマークを周知し、普及啓発を図っている。

問 市で取得できるヘルプマークの配布数は。

答 配布を開始した平成30年度が11枚、令和元年度が89枚、令和2年度が59枚で、令和3年10月までに累計290枚を配布した。

問 支援をいとわない意思表示である逆ヘルプマークについての見解は。

答 県等において統一の規格で普及啓発をする際は、前向きに検討したい。

問 ヘルプマークを知らない方に対する理解への取り組みは。

答 困っている方に声をかけるなど、思いやりのある行動をとる方が一人でも増えるよう、粘り強く普及啓発を続けていく。